

環境がもたらす子どもたちの運動能力について

スポーツ科学科2年 日野ゼミ
山口風佳 山下凌市 飯川隆平 松本美夢 中村莉子

1. はじめに

私たち日野ゼミでは、サンフィールドスポーツクラブ様から体力測定をしてほしいとのご依頼をいただいたことから、今年度の研究テーマを「自然豊かな環境下で暮らす子どもたちと、都会で暮らす子どもたちの運動能力の違い」とし、調査した。私たちは、自然豊かな環境下で暮らす子どもの方が外遊びに適した環境下にあるという意見を参考に、自然豊かな環境下にある子どもの運動能力が高いのではないかと考えた。しかし一方で、近年、都会にある保育園のほとんどが体操教室を導入しているという現状を知り、運動の種類によって変わるのではないかという予想を立てて行った。

2. 目的

自然豊かな環境下で暮らす子どもたちと都会で暮らす子どもたちの運動能力がどのように違うのか、また、子どもたちを取り巻く環境は影響しているのか調査し、比較することを目的とした。

3. 方法

都会にあるA保育園と自然豊かな環境下にあるB保育園を対象に実施した。

1) 体力測定

6月5日にA保育園、8月5日にB保育園で5歳児を対象とした体力測定を実施し、その記録を比較した。時間は各保育園にお時間をいただき、午前9時30分から正午までの時間で行った。種目は、①25M走②立ち幅跳び③ボール投げ④両足連続とび⑤体支持持続⑥捕球の6種目を行い5段階得点換算表（次ページに掲載）で得点化した。

2) アンケートの実施

上記の体力測定と並行して、対象児童の保護者の方にアンケートを実施した。内容は、遊び、生活習慣、家庭環境の3項目を設け、それぞれの項目に2～4つの質問を設けた。保育園ご協力のもと体力測定の前日までに担任の先生に提出していただき体力測定当日に保育園に赴いた際に回収した。（作成したアンケート用紙は、次ページに掲載）

4. 結果

1) 体力測定

今回、B保育園での測定日当日、異例の猛暑であったため、B保育園と相談の上、25M走、ボール投げの二種目は子どもの安全を考え測定不可と判断した。上記二種目を除いた種目を比較すると、両足連続とびにおいて、A保育園のほうがB保育園に比べて記録が高かった。さらに、体支持持続において、A保育園の女の子の記録が大幅に高いことが分かった。その他の種目はさほど変わらなかったが、全体で見るとA保育園のほうがB保育園に比べて記録が高いという結果だった。

2) アンケート調査

まず、遊びの項目では、鬼ごっこの割合がA保育園のほうが多かった。さらに、遊び場については、A保育園では公園が多いのに対し、B保育園では自宅の庭が多かった。次に、生活環境の項目については、起床・就寝時間において、B保育園のほうが早寝早起きであった。さらに、登園手段では、B保育園の車の利用が圧倒的に多かった。そして、家庭環境の項目では、保護者（特に母親）のスポーツ歴について、B保育園は少なかった。それに比例するように、習い事も少なかった。

5. 考察

アンケート結果での遊びの違いや遊び場の違いは、マンション世帯が多いA保育園に比べて庭を所有している一軒家が多いことが考えられる。また、保育園の数が多い都会に比べて、保育園が少なく園までの距離が遠いことに加え、通勤ラッシュが8時から始まるB保育園の家庭は、車での送迎を余儀なくされることはうなずける。そして、保育園の周りの習い事の充実さの違いから、運動の経験に差が生じているという点は、まさに環境がもたらす子供の運動能力の違いといえよう。正しい体の動かし方を体操教室で学んでいるA保育園は、やはりB保育園よりも体力測定の記録が高かったのだと私たちは考える。そこには、保護者のスポーツへの関心と、運動指導者が楽しく、そして自然と運動能力を向上させられる環境を作ることが大切なのではないだろうか。

6. まとめ

私たちの今回の体力測定及びアンケートの実施は、低下しつつあるとされる子どもの運動能力の向上を目的としている。今回の調査結果が子どもの運動能力の向上に貢献できれば幸いである。運動能力がすべてではないが、子どもの健やかな成長のためには、やはりこの時期の運動が非常に重要である。今後も子どもの運動能力の向上に献身的に取り組んでいきたい。

7. 参考文献

・体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書 ー第3章 調査実施要領と調査結果ー 文部科学省

(指導教員 日野立稔先生)